

バスク語の自動詞分裂と二言語使用

石塚 政行

noitartsinimda@gmail.com

キーワード：バスク語 自動詞分裂 能格性 二言語使用 借用

要旨

バスク語には自動詞分裂が見られる。一類自動詞は、主語の被動者性が高く、絶対格名詞句を主語とし、助動詞に存在動詞を選択する。二類自動詞の主語は能格で標示され、助動詞は所有動詞となる。西部諸方言では分裂が進み、自動詞ははっきりと2つの類に分かれる。一方、東部諸方言は二類に属する自動詞が非常に限られており、純粋な能格型に近い文法組織を持つ。中部諸方言は両者の中間的な様相を呈する。歴史的には東部諸方言がもっとも古い状態を残しており、西部諸方言を中心に起きた変化が中部へと及びつつあるものと考えられている。

本稿では、東部と中部の境界付近の話者の体系をフランス語からの借用語に注目して詳しく記述する。二類自動詞として用いるのは、調査した自動詞の10%以下である。これらの二類自動詞のうち、新しい借用語ではない語の中には無生物主語の放出動詞と非限界的移動動詞の2つの意味グループを認めることができる。借用された自動詞が一類と二類のどちらに分類されるかという観点から、この話者の文法知識の中でこれらの意味グループが高い際立ちを持っていることを主張する。新しい借用語が無生物主語の放出や非限界的移動を表す場合、必ず二類自動詞として扱われる。そうでない場合、借用元の自動詞が所有動詞を完了助動詞として選択するならば、二類として標示することもできる。一方、借用元で存在動詞が選択されるならば、必ず一類自動詞として借用される。さらに、このパターンからは、東部諸方言に代表されるように二類自動詞が非常に少ない場合であっても、バスク語とフランス語の自動詞分裂の間に話者は対応関係を見出しているということが示唆される。

1. はじめに — バスク語とロマンス語の接触

バスク語は、その歴史の始まりから常にラテン語・ロマンス語の隣にあった。バスク語の直接の祖先（またはその近縁の言語）とされるアクイタニア語は、ラテン語碑文に残された人名や神名として今に伝わっている。2000年にわたる接触によって、ラテン語、そしてその子孫であるロマンス諸語は、バスク語の語彙と文法に大きな影響を与えてきた。たとえば、ラテン語に由来するバスク語の語彙項目は、*lege* < *LEGE* 「法律」や *errege* < *REGE* 「王」といった文化的語彙だけでなく、*gorputz* < *CORPUS* 「体」や *bago* < *FAGU* 「ブナ」といった基本的な語にまで及ぶ (Trask 1997: 259f.)。また、動詞の完了分詞の語尾としてもっとも生産的に用いられる接尾辞 *-tu* も、ラテン語の完了分詞の借用によって成立した (ibid., p. 214)。

バスク州政府が 2011 年に行なった調査によれば、バスク地方¹に住むバスク語の話し手は 71 万人を超え、そのすべてがバスク語に加えてスペイン語またはフランス語を話すバイリンガルである (Eusko Jaurilaritza 2013: 15f.)。現代のバスク語話者たちも、スペイン語・フランス語という大きな影響力を持つロマンス語とともに暮らしている。彼らの談話の中には、コード切り替えや臨時的な借用が見られることがある。たとえば次の例は、自身の父親についての談話の一部で、父の兵役について語っているところである²。

- (1) *beste urte bat gehio atxiki zituzten ... pour garder les frontières,*
 other year one more guard.PFV AUX for guard.INF the.PL frontier.PL
frontierr=en atxiki-tze=ko
 frontier=DEF.PL.GEN guard-GER=for
 「(1918 年に戦争は終わったが) もう 1 年 (国境を) 守った……
 国境を守るために (残った)」 (JO)

下線部はフランス語で、その前の「...」は言いよどみを表す。助動詞 *zituzten* の形から、*atxiki* 「守る」の目的語として予期されている名詞句の数は複数であることがわかる。この複数名詞句は、後半から考えると *les frontières/frontierrren* 「国境」だろう。しかし、話し手はその目的語を言うことなく発話を中断し、コードをフランス語に切り替える。*pour garder les frontières* では、当初の発話とは異なる構造が採用され、「国境を守る」の部分が側置詞句で表現されている。最後に、そのフランス語の側置詞句が、相当するバスク語の側置詞句に言い換えられる。この一連の流れは次のように解釈できる。言いよどみの前の段階で、話し手は「国境」を表すバスク語の名詞を想起できなかつた。フランス語の単語 *frontière* は想起可能だったので、コードをフランス語に切り替えた。そして、その単語を臨時的に借用し、直前のフランス語の発話に当たるバスク語の合成的表現を作り出した。

この例に現れているようなコード切り替え・臨時的借用は、筆者の観察の限りでは、ごく一般的に行なわれている。もちろん、バスク語の分布域は広いので、二言語使用の実態は当然ながら多様であることが予想される。しかし、少なくとも筆者の調査協力者たちの言語知識は、こうしたコード切り替え・臨時的借用が自然に位置づけられるように記述される必要がある。

本稿は、バイリンガルとしてのバスク語話者の言語知識を、バスク語の自動詞分裂とフランス語からの借用を通して考察することを目的とする。自動詞分裂は、自動詞の主語 (一項動詞の唯一の項 S) が受ける文法的扱いによって、自動詞が異なる 2 つの類に分かれる現象である。

¹ バスク地方は、スペインとフランスにまたがる歴史的な地域で、行政的にはスペインのバスク州とナバラ州の全域、フランスのピレネーアトランティック県の一部に相当する。

² 以下、例文に「JO」とあれば Jeanne Ourthiague 氏、「BI」とあれば Bruno Iribarne 氏による。両氏ともフランスバスクの低ナバラ地方出身で、Ourthiague 氏はサンミシェル (Saint-Michel) 出身の 1940 年生まれ的女性、Iribarne 氏はレクンベリ (Lecumberry) 出身の 1957 年生まれの男性である。

バスク語の自動詞には、主語が他動詞の目的語（非動作主項 P）と同じく絶対格で標示される「一類」と、他動詞主語（動作主項 A）と同じく能格で標示される「二類」がある。

(2) a. 他動詞

Peio=k jan du xagarr=a

P.=ERG eat.PFV has(AUX) apple=DEF

「Peio はそのリンゴを食べた」

(BI)

b. 一類自動詞

xagarr=a adarr=etik eror-i da

apple=DEF branch=ABL fall-PFV is(AUX)

「リンゴが枝から落ちた」

(ibid.)

c. 二類自動詞

vitr=a=k bria-tu du

windowpane=DEF=ERG glitter-PFV has(AUX)

「窓ガラスが輝いた」

(ibid.)

一類と二類は、主語の格標示に加えて動詞の側にも違いが見られる。バスク語の定動詞は絶対格項・能格項・与格項に一致する。一類は絶対格の、二類は能格の一致を示す。二類の一致パターンは他動詞のそれと同じである（ただし、絶対格項=目的語の一致はデフォルトの三人称単数の値しか取れない）。また、バスク語の動詞の大部分は定形を持たず、持つ動詞でも定形が表せる時相は限られている。そのため、多くの場合、定形節の述語になるためには助動詞が必要となる。このとき、一類は存在を表す *izan* を助動詞に選択するが、二類と他動詞は所有を表す **edun* を助動詞とする³。

この分裂には方言差がある (Aldai 2009)。西部諸方言では、一類と二類はおもに主語の「被動者性」によって使い分けられており、その文法組織は意味に基づいた分裂 S タイプのアライメントを示す。一方、東部諸方言では二類自動詞としてふるまう語がごく一部に限定されており、純粋な能格型に近い。中部諸方言はその中間的な様相を呈しており、二類に属する自動詞の範囲が東部より広く西部より狭い。歴史的には、東部諸方言のように二類が限定的な状態が古く、西部を中心に二類の範囲が広がってきたと考えられている (Aldai 2008)。

本稿が取り上げるのは、東部諸方言と中部諸方言の境界付近の話者 Bruno Iribarne 氏のデータである。氏の自動詞分裂の体系では二類自動詞はごく一部に限られており、Aldai (2009) が記述する東部諸方言の特徴によく合致する。この二類自動詞を、比較的最近の借用と考えられる語群に注目して整理することで、氏の文法知識のネットワーク構造を明らかにする。

³ **edun* は、方言によって異なる代表形が用いられているため、歴史的な再建形を中立的な代表形として用いる習慣となっている。吉田 (2000) の DU 助動詞に相当する。

以下では、まず2節で自動詞分裂について通言語的な観点からまとめる。3節ではバスク語の自動詞分裂の概要を紹介する。4節で Iribarne 氏⁴のデータを提示し、借用語と非借用語に分けて整理する。

2. 自動詞分裂とは

バスク語は、ヨーロッパで話されている身近な能格言語として、フンボルト以来言語学者たちに親しまれてきた。しかし、この言語が真に能格的と呼ぶにふさわしいかどうかは、いまだに論争的となっている。

能格性とは、自動詞の唯一項 S と他動詞の非動作主項 P が文法的に同じ扱いを受け、他動詞の動作主項 A と異なる標示や挙動を見せることである。能格型の文法組織は、名詞句の格標示・動詞の一致・関係節化の可否・コントロール構文など、文法のさまざまな側面に見られる。能格型は、対格型と並んで重要な S/A/P のアラインメントの型のひとつである。

しかし、ある個別言語が文法のあらゆる面で能格性を示すということではなく、ふつう能格性はひとつの言語内で対格性と共存する。こうした現象は能格性分裂として知られるが、能格性分裂には通言語的にいくつかのパターンが観察される。主な分裂のパターンには3つある。第1は、名詞句の指示対象のタイプによる分裂で、一般に有生性階層で高い位置にある名詞句で対格型、低い位置にある名詞句で能格型となる。第2はテンス・アスペクト・ムードによる分裂で、ふつう非過去時制・未完結相・非現実相で対格型、過去時制・完結相・現実相で能格型となる⁵。

第3のパターンが自動詞分裂である。自動詞が意味的・語彙的条件によって2つの類に分裂し、一方の類の S_P は P と、もう一方の類の S_A は A と同じ扱いを受ける。自動詞分裂は動詞の一致に見られる例が多く、S の格標示に現れる言語は珍しい (Donohue 2008, Comrie 2013, Siewierska 2013)。傾向としては、S の動作主性が高い自動詞や、動態 (非状態) 事象または非限界的 (atelic) な事象を表す自動詞で対格型、そうでない自動詞で能格型となる。ただし、個々の動詞がどちらの類に属するかは言語によって異なり、また、ひとつの言語の中でも言語変化によって予測不可能になっている場合がある (Mithun 1991)。さらに、自動詞分裂が語彙的に固定しているのか (分裂 S)、構文全体の意味によって類間の移行が可能なのか (流動 S) といった点でも言語ごとの違いがある (Dixon 1994: 70ff.)。そして、分類が固定的な言語では、一方が閉じた類、他方が開いた類となっていることもある (Merlan 1985)。自動詞分裂を示す文法組織は、能格型や対格型と並び立つ独立のアラインメントの型 (活格型) としてしばしば分

⁴ これまでの研究 (石塚 2012, 2013 など) では、同氏から得たデータを「レクンベリ方言」のデータとして扱っていたが、同氏の体系をレクンベリで伝統的・一般的に用いられている方言の代表とすることが妥当かどうかを決定するためには他の話者の文法と比べる必要がある。そのため、本稿では Iribarne 氏個人の体系を記述するという立場を取ることにした。

⁵ まったくの余談だが、バスク語は過去時制における一・二人称の一致が対格型となるという点で第2の普遍性の例外となっている。このような例外的な文法が形成された歴史的経緯については Aldai (2000) を参照。

類される。とはいえ、大局的に見れば、S に特別な標識を要求する自動詞は多かれ少なかれどんな言語にもあるので、類型論上 S/A/P のアラインメントは対格型から活格型を経て能格型へと至る連続体として捉えるのが妥当であり、その間に厳密な境界を設けることは難しい (Nichols 2008)。

生成文法の伝統では、Perlmutter (1978) が非対格性仮説を提唱したことで、自動詞が非対格と非能格に二分され、後者が他動詞と同様にふるまう現象が注目を集めてきた。Burzio (1986) はイタリア語の非対格動詞を検知するテストとして、助動詞選択・過去分詞の一致・主語と動詞の倒置・*ne* による接語化・絶対分詞構文といった現象を用いることを示した。Van Valin (1990) は、イタリア語におけるこれらの現象と、グルジア語の格と動詞の一致に見られる自動詞分裂に、共通して働いている意味的原理 (語彙的アспект) を提示し、格標示や動詞の一致といった狭義の自動詞分裂と非対格性現象を統一的に捉えている。狭義の自動詞分裂と非対格仮説の関係については慎重な見方もあるものの (Levin & Rappaport Hovav 1995: 289 n. 9)、バスク語の自動詞分裂研究では非対格仮説の観点から多くの貢献がなされている (Levin 1983, 1989; Ortiz de Urbina 1989; Oyharçabal 1992; Salaburu 1992; Laka 1993, 1995; Alcázar 2003, 2011, 2012 など)。

自動詞分裂は意味的な原理に基づいているというのが多くの研究者の一致した見解である。通言語的に見て、そうした意味的原理は、一般に S の動作主性あるいは動詞の語彙的アспектの観点から特徴づけられる (Van Valin 1990, Mithun 1991)。上述したように、動作主性が高い S、動態事象・非限界事象を表す自動詞の S が A と同じ扱いを受け (対格型)、そうでない S が P と同じ扱いを受ける (能格型) 傾向が見られる。

たとえばロマ語 (Loma: マンデ諸語、リベリア) では、未完結相の自動詞の主語代名詞は、*li* 「行く」や *lo* 「落ちる」といった動態動詞のとき A と同じ格、*βala* 「大きい」のような状態動詞の場合は P と同じ格で標示される (Arkadiev 2008)。また、グルジア語のアオリストや希求法では、(3a) のように限界的な事象を表す自動詞と (3b) のように非限界的な事象を表す自動詞の S の格が区別される。限界動詞では P と同じ主格、非限界動詞では A と同じ能格が用いられる (ibid.)。これらは、語彙的アспектに基づいた自動詞分裂の例である。

- (3) a. *c'q'al-i ga-tb-a*
 water-NOM PRV-warm.up-AOR.3SG.SBJV
 'The water became warm.' (Arkadiev 2008)
- b. *c'q'al-ma i-duy-a*
 water-ERG PFV-boil-3SG.SBJV
 'The water boiled (for some time).' (ibid.)

動作主性を構成するさまざまな要因も自動詞分裂に関わりがある。まず、動詞の表す事象に対する主語者のコントロール (あるいは意志性) によって分裂している言語がある。たとえば、

バツ語 (Bats: 北東コーカサス諸語、グルジア) は流動 S 型の分裂を示し、主語者に事象に対するコントロールがあれば能格で、なければ主格で S が標示される。

- (4) a. *as wože* b. *so wože*
 1SG.ERG fell 1SG.NOM fell
 ‘I fell (on purpose).’ ‘I fell (by accident).’ (Holisky 1987)

また、中央ポモ語 (Central Pomo: ポモ諸語、アメリカ) では、コントロールに加えて主語者の受影性 (affectedness) が自動詞の類を決定している。S にコントロールがなく、かつその事態から影響を受ける場合には対格で標示され、そうでない場合には主格で標示される。

- (5) a. *ʔo: šyéšew* b. *ʔa: ʔe qól*
 1SG.ACC tremble 1SG.NOM COP tall
 ‘I tremble.’ ‘I am tall.’ (Mithun 1991)

3. バスク語の自動詞分裂

3.1 格標識・定動詞の一致・助動詞選択

最初に、共通バスク語の例を用いて名詞句の格標示と定動詞の一致、助動詞選択について簡単に紹介する。格は、名詞句の末尾に標示される。格標識は名詞句の最後の語に付く拘束形態素である。多くの自動詞は、(6a) のように何も標識が付かない名詞句を主語 (S) とする。他動詞では、(6b) のように主語 (A) が =*k* で標示される一方、目的語 (P) には何も標識が付かない。伝統的に、ゼロ標示の名詞句の格は絶対格、=*k* が標示する格は能格と呼ばれており、本稿でもそれを踏襲する。

- (6) a. *Peru dator.*
 P.[ABS] PRS-come
 ‘Peter is coming.’ (de Rijk 2008: 196)
- b. *Peru=k eta Miren=ek ogi=a da-kar-te.*
 P.=ERG and M.=ERG bread=DEF[ABS] PRS-bring-ERG:3PL
 ‘Peter and Mary are bringing the bread.’ (ibid., p. 198)

定動詞は、絶対格項・能格項・与格項に一致する。絶対格項の標示は基本的に接頭辞による。たとえば、(6a) の *dator* は主語を一人称単数に変えると *n-ator* となり、(6b) の *dakarte* は目的語を一人称単数に変えると *n-akarte* となる。一方、能格項の標示は基本的に接尾辞による。(6b) の *dakar-te* は主語が一人称単数の場合 *dakar-t* となる。(6) のように動詞が単独で定形節の述語として機能することは少なく、多くの場合、(7) のように動詞の非定形 (分詞または原

形)と助動詞から構成される複合的な述語が用いられる。大多数の動詞は定形を持っておらず、そもそも単独では定形節の述語となることができない。一類自動詞は助動詞として存在動詞 *izan* を選択し、二類自動詞と他動詞は所有動詞 **edun* を選択する。

- (7) a. *Sei=etan etor-tzen da.*
 six=DEF.PL.LOC come-IPFV PRS.be(AUX)
 ‘He (usually) comes at six o’clock.’ (de Rijk 2008: 146)
- b. *Zenbat-nahi arrain ekarri-ko d-u-t.*
 however.much fish bring-FUT PRS-have(AUX)-ERG:1SG
 ‘I will bring as much fish as you want.’ (ibid., p. 792)

3.2 裸名詞 + *egin* の句動詞

Levin (1983) 以来広く認識されているように、よく知られている言語では一語の自動詞で表現されるような概念が、バスク語では「裸名詞 + 動詞 *egin*」の組み合わせによって表現されることが非常に多い。*egin* は、他動詞としては「する・作る」、自動詞としては「なる」の意味で用いられる動詞で、たとえば (8) の *lan egin* は、名詞 *lan* 「仕事」と *egin* からなり、「働く」という意味を表す。この例の助動詞からわかるように、N + *egin* の主語は能格で標示され、助動詞は所有の **edun* が選択される。

- (8) *Hemen lan egi-ten d-u-t egunero zortzi edo hamar ordu=an.*
 here work do-IPFV PRS-have(AUX)-ERG:1SG everyday eight or ten hour=DEF.LOC
 ‘Here I work every day for eight or ten hours.’ (de Rijk 2008: 515)

N + *egin* が表す概念は、*igeri egin* 「泳ぐ」・*jauzi egin* 「跳ねる」・*laster egin* 「走る」といった様態が指定された移動、*argi egin* 「輝く」・*oihu egin* 「叫ぶ」・*zaunka egin* 「吠える」のような光や音の放出、*amets egin* 「夢見る」・*kasu egin* 「注意する」・*lo egin* 「眠る」・*negar egin* 「泣く」などの心身の基礎的行為などである。その分布は語彙的アスペクトや S の動作主性の点で非能格的な側に偏っていると言える。

egin と結びつく裸名詞は動詞に編入 (incorporate) されていると分析されることもある。バスク語ではふつう裸名詞が項として許されず、項となる名詞句は必ず限定詞を要求する。それにもかかわらず、これらの句動詞は裸名詞が出現する点で特異である。

しかし、*egin* と結びつく裸名詞には一般の目的語らしい特徴もある。たとえば、(9b) のように動詞直前の焦点位置に別の要素が現れるとき、裸名詞は *egin* と離れて現れる。

- (9) a. *Ni=k [...] ihes egin nuen goi=ko sala=ra.*
 1SG=ERG flight do.PFV PST.have(AUX) upstairs=LOC.ADN room=ALL
 ‘I [...] fled to the room upstairs.’ (de Rijk 2008: 146)
- b. *Gaur ber=tan egin d-u-t ihes han=dik.*
 today itself=LOC do.PFV PRS.have(AUX)-ERG:1SG flight there=ABL
 ‘I fled from there just today.’ (ibid., p. 305)

また、否定文で不定の直接目的語には義務的に分格標識が付加されるが、これは (10a) のように N + *egin* の裸名詞の場合も随意的に用いることができる。また、動詞によっては (10b) のように裸名詞を形容詞で修飾することができる。

- (10) a. *Deabru=a=k ez du lo=rik egi-ten.*
 devil=DEF=ERG not PRS.have(AUX) sleep=PRT do-IPFV
 ‘The devil does not sleep.’ (de Rijk 2008: 305)
- b. *Lo luze=a egin du.*
 sleep long=DEF do.PFV PRS.have(AUX)
 ‘He has slept a long time.’ (ibid., p. 306)

このように、N + *egin* は単純な自動詞とは異なり、項を2つ持つ他動詞構文のようなふるまいを示す。上述したように、N + *egin* が常に能格主語を取り助動詞に HAVE を選択するのは、これが他動詞文の一種だからと考えられる (cf. Trask 2002)。N + *egin* の挙動には後で見ようような方言差もないので (Aldai 2009)、本稿ではこの種の句動詞をひとまず考察の対象としないことにする。

3.3 単純自動詞の分裂の方言差

バスク語の自動詞の一部が能格主語を取り **edun* を助動詞に選択することは、Lafitte (1962: 189f.) や Lafon (1975) を始めとして広く認識されてきた事実である (Levin 1983: 290ff., 1989; Ortiz de Urbina 1989: 1–61; Oyharçabal 1992; Salaburu 1992; Cutting 1994; Laka 1995; Trask 1979, 2002; Aldai 2008, 2009; Alcázar 2003, 2011, 2012 など)。Aldai (2008, 2009) は、このような二類自動詞の範囲が方言によって異なること、歴史的に見ると、バスク地方西部を中心として二類自動詞の範囲が広がってきていることを明らかにした。

次ページの図1に示したのはバスク地方の地図である。実線は伝統的な地域区分、丸は各地域の中心都市、点線はバスク語の分布域の境界を表す。方言区分は地域区分とある程度一致する (方言について詳しくは Zuazo (2006) を参照)。

Aldai (2009) によれば、二類自動詞の範囲に関して諸方言は3つに大別できる。西部 (ビスカイア方言・ギプスコア方言)、中部 (ナバラ方言・ラブル方言)、東部 (低ナバラ方言・ス

ール方言)である。西部諸方言ではきわめて広い範囲の自動詞が二類としてふるまうのに対して、東部諸方言ではその範囲は非常に限定されている。中部諸方言はその中間である。



図 1. バスク地方の地図 (Aldai 2008 を元に作成)

3.4 バスク語の自動詞分裂の意味的区別

Van Valin (1990) や Mithun (1991) が提示した2つの観点——主語の動作主性と語彙的アスペクト——は、いずれも先行研究で検討されている。語彙的アスペクトについては、Cutting (1994) が RRG の枠組みで考察している。Cutting によれば、活動 (activity) 動詞が二類、それ以外が一類自動詞となるという。この説は確かに多くの例を説明できるが、*igan* 「上がる」や *jaitsi* 「下がる」、*zabaldu* 「広がる」のような、非限界的な変化を表す動詞が一類としてふるまうことは、語彙的アスペクトの観点だけでは捉えられず、やはり「主語者が変化するかどうか」という観点が必要であろう。

一方、Levin (1983: 290ff.) は、一類と二類の違いを主語の動作主性に帰し、二類自動詞は動作主を主語とし、それ以外は被動者を主語とすると特徴づけている。Trask (2002) はこれに反対する。*joan* 「行く」、*etorri* 「来る」、*jaiki* 「起き上がる」、*ezkondu* 「結婚する」などは、動作主を主語とするのにどの方言でも一類自動詞に分類される。したがって、バスク語の自動詞分裂が Levin の提案するような意味的な違いに基づくとは考えられないと Trask は述べる。

それに対し、Aldai (2009) は「被動者性」(patientivity) という概念を提案している。彼の主張によれば、被動者性の主語を取る自動詞は一類、そうでない自動詞が二類となる。Trask が挙げた反例は確かに動作主性の自動詞だが、それらには同時に「被動者性」があるので一類自動詞となるのだと言う。

Aldai は Dowty (1991) のプロトロールの考え方をを用いて「被動者性」を定義する。彼によれば、典型的被動者に関する要因は (a) change of state or position (状態または姿勢の変化)、

(b) telicity (限界性)、(c) affectedness (受影性) の3つである。たとえば、「壊れる・開く・死ぬ・立つ・座る・倒れる」「服を着る・服を脱ぐ」「来る・行く」などは、限界的变化を表し、その参加者は典型的被動者である。それに対して、典型的な「非被動者」は (a) non-change (非変化=状態・活動)、(b) atelicity (非限界性)、(c) non-affectedness (非受影性) を備えると言う。Aldai は、非限界的活動(働く・踊る・走る・泳ぐ)、光や音の放出(叫ぶ・吠える・輝く・音を出す)、気象現象(降雨・降雪)は典型的な非被動者の主語を持つと主張する。

Aldai の議論のもっとも根本的な問題は、「典型的な非被動者」という考え方である。彼は、主語が被動者なら絶対格で、非被動者なら能格で標示されるという仮説を保持するために典型性を導入していると考えられる。一見したところ被動者とは思えないようなものも、典型的被動者と何らかの特徴を共有しているためにそれと同じようにふるまうということであろう。ところが、被動者に対する「非被動者」の典型性の基準は、被動者の典型性の基準を満たさないこととして定義されている。これだけでは、被動者と非被動者それぞれの典型性を定義することはできても、非典型的な被動者と非被動者を区別することができない。たとえば、Aldai によれば「非限界的な移動」(+変化、-限界、+受影?⁶)の主語は非典型的な被動者であり、「天候変化」(+変化、+限界、-受影?)の主語は(非人称動詞の主語の被動者性を考えることが有意義かどうかは疑問だが)非典型的な非被動者であると言う。しかし、単純に素性の数だけを数えると、どちらもそれぞれの典型からの距離は同じと考えられる。これらのうち一方を被動者とし、他方を非被動者とするために、素性間に何らかの差をつけてやればよいかもしれない。あるいは、Aldai はそのような差を自明のものと考えている可能性もある。しかし、これらの素性の概念規定には不明瞭な点があるので、Aldai (2009) だけに基いてこの理論をこれ以上発展させることは難しいと言わざるを得ない。

そもそも、「非被動者のプロトタイプ」が仮にバスク語話者の知識のうち存在するとして、そこに何らかの説明を与えることにも困難がある。動作主や被動者といった概念が通言語的に妥当なプロトタイプを持つのは、人間であることに由来する経験の共通性に支えられているからだと考えられる。意図的に何らかの結果を引き起こす動作主や、行為の対象となって変化を被る被動者が典型性を示すのは、それらの諸特徴が繰り返し共起し、ゲシュタルトとして経験されるからである。Aldai が提案するような消極的特徴づけが経験のまとまりを成すとは考えにくい。

本稿では、バスク語一般の自動詞分裂の背後に働いている意味的原理を細かく検討することはできないが、この問題は次のような観点から考察されるべきであると考えられる。求められているのは、通言語的に見られる自動詞分裂の意味的傾向と、個別言語の具体的な実現——普遍性と多様性——を適切に捉えられる理論である。まず、このような普遍性が存在するのは、人類が生物学的資質と基本的な世界を共有していることによって、各言語が動作主・被動者・他動

⁶ Aldai は「非限界的移動」と「天候変化」の動詞の受影性について言及していないため、それぞれの受影性の値については筆者の推測である。

性といった概念のプロトタイプを共有するからである。一方で多様性が生じるのは、そのプロトタイプからどのような拡張をしてきたかという点で言語ごとに異なる歴史があるからである。したがって、探求すべきは、動作主や被動者のプロトタイプの精緻な特徴づけと、各言語の拡張のネットワークの詳細な記述である⁷。

後者について言えば、各類のすべての成員に共通する特徴があるとは限らないという点に注意が必要である。むしろ、使用と知識の両面で、より低次のカテゴリーが重要な役割を果たす⁸。たとえば、一類自動詞のプロトタイプを、非意図的に外的な力によって変化を被る被動者とする、意図的な移動の主体や存在物はこのプロトタイプからの拡張と考えることができる。前者は、Aldai が言うように、その主体に変化が生じるという点で共通し、後者は、非意図的で内的な力を持たない点に関連性がある。つまり、それぞれの拡張の仕方は異なっており、全体に共通するスキーマを（二類自動詞と区別できるような形で）抽出することは不可能である。しかし、意図的な移動の動詞と存在動詞は、プロトタイプの変化動詞を介して家族的類似性を持っていることによって、ひとつのカテゴリーを成しているのである。

次節で取り上げる話者のデータからも、このような低次のカテゴリーが言語知識として重要な地位を占めていることがわかる。

3.5 ロマンズ語からの借用とバスク語の自動詞分裂

ロマンス語から自動詞が借用された場合、それが再帰代名詞を伴う代名動詞であるかどうかによってバスク語でどちらの類の自動詞となるかが異なることがわかっている。Sarasola (1977) は、スペイン語から新しく借用された自動詞は、二類としてふるまう傾向があることを指摘した。Alberdi Larizgoitia (2003) は、代名動詞の場合にはむしろ一類となり、二類として扱われるのは借用元で代名動詞でないものに限られることを明らかにした。これは Aldai (2009) の調査でも裏付けられている。また、福井 (2016) によれば、スペイン語からの翻訳借用と考えられる自動詞の用法では固有の一類自動詞が二類自動詞として扱われるという。

これは、単にロマンス語の代名動詞の典型的な意味が、バスク語の一類自動詞の典型的な意味に対応しているからではない。たとえば、フランス語の代名動詞 *se disputer* 「言い争う」は、バスク語の一類自動詞の典型的な意味とは大きく異なり、主体の状態変化を伴わない意図的な行為を表すが、借用された *disputatu* は、一類自動詞として扱われる。これは、借用元が代名動詞として分析できるためだと考えられる。

- (11) *emazte=a=rekin disputa-tu niz*
 wife=DEF=COM dispute-PFV I.am(AUX)
 「私は妻と言い争った」 (BI)

⁷ 他動性のプロトタイプから対格型・能格型・分裂型のシステムが拡張として生じる理路については、Næss (2007) や Langacker (2008: 363ff.) に学ぶところが大きい。

⁸ Bybee & Eddington (2006) や平沢 (2015) を参照。

4. 事例研究 — Bruno Iribarne 氏の自動詞分裂

Iribarne 氏は、低ナバラ地方レクンベリ出身の1957年生まれの男性である。ホテル・レストラン・バーを営み、牛を育てている。バスク語話者の両親に育てられ、古くからの知人とはバスク語で話す。一方、妻と2人の娘たちとはフランス語でしか会話しない。

彼のバスク語では能格主語が多くの場合非義務的である。主語名詞句が対比や疑問の焦点になっている場合にのみ能格が必須となり、ふつうは絶対格が用いられる（石塚 2012 を参照）。そのため、自動詞の主語の格からは自動詞分裂があるかどうか分からない場合があるが、助動詞に何が選択されるか（存在動詞か所有動詞か）に違いがはっきりと現れる。

- (12) a. *Peio jan du xagarr=a*
 P. eat.PFV has(AUX) apple=DEF
 「Peio はそのリンゴを食べた」
- b. *xagarr=a adarr=etik eror-i da*
 apple=DEF branch=ABL fall-PFV is(AUX)
 「リンゴが枝から落ちた」
- c. *vitr=a bria-tu du*
 windowpane=DEF glitter-PFV has(AUX)
 「窓ガラスが輝いた」

自動詞はたいいていの場合存在動詞を選択する。所有動詞を選択するものは、調査した371の自動詞のうち、以下の27個に限られる。また、所有動詞のみを選択するもの（*を付した）はそのうちの7つだけである。

afaldu	夕食をとる	funtzionatu	機能する	manifeztatu	デモをする
argitu	光る	hegaldatu	飛ぶ	patinatu	スケートをする
aterriatu	着陸する	heldu	至る	paxatu	架かる
avortatu	中絶する	igerikatu	泳ぐ	pauxatu	休憩する
axkaldu	朝食・昼食をとる	iraun	続く*	ramatu	ボートを漕ぐ
bidaiatu	旅行する	irakin	沸騰する*	ufatu	吹く*
briatu	輝く*	jauzi	跳ぶ	zkiatu	スキーをする
erreñatu	君臨する	jo	照りつける*	zonatu	音を出す*
fermātatu	発酵する	kurritu	走る	vibratu	震える*

Iribarne 氏の体系は Aldai (2009) の調査とよく一致している。東部諸方言（レクンベリは低ナバラ方言の分布域に含まれる）は、Aldai によれば純粋な能格体系に近く、自動詞はほとんど一貫して絶対格主語を取る。これは、Iribarne 氏が371の動詞のうち27のみで所有動詞を選択

することと合致する。さらに、例外的な 27 の動詞にも何らかの説明を与えることができる。以下では、まず、非借用語について、所有動詞のみを選択する動詞と、存在動詞と所有動詞の両方を選択しうる動詞を分けて考察する。その後、明らかにフランス語との関係が認められる借用語がどちらの助動詞を選択するかを検討する。

4.1 所有動詞のみを選択する自動詞

最初に所有動詞のみを選択する動詞について検討する。(13) の 4 つの動詞は西部から東部までどの方言でも能格主語を取る動詞である (Aldai 2009)。*iraun* 「続く」と *irakin* 「沸騰する」に含まれる要素 *-ra-* は、*ibili* 「動く」 ⇔ *erabili* 「動かす」や *ikasi* 「学ぶ」 ⇔ *irakatsi* 「教える」のペアに見られるかつての使役接辞と同形である。そのため、これらは古くは使役他動詞として使われていたのではないかと考えられ、その後何らかの意味変化を経て自動詞となったものの、主語に能格名詞句を取る性質は保持されたという説明が可能である (Lafon 1975, Trask 2002)。*jo* 「(日)が 照りつける」は、他動詞 *jo* 「打つ」からメタファーによる意味拡張を経て成立したとすれば、これもまた歴史的な性質を保持していることになる (Aldai 2009)。*ufatu* 「吹く」は Aldai (2009) の *buhatu* に相当する。Aldai は、この動詞が能格主語を取るのは、これが比較的最近ベアルン語から借用されたためであると言う (借用については後述)。それに加えて、*ufatu* が「息を吹きかける」という意味の他動詞用法を持つことも関連しているだろう。

これらの動詞は、無生物の主語者からのエネルギーの放出を表している、という共通性がある。*iraun* 「続く」については、エネルギーの放出は表していないが、主語が無生物であるという関連性がある。

(13) *iraun* 「続く」、*irakin* 「沸騰する」、*jo* 「照りつける」、*ufatu* 「吹く」

a. *euri=a irau du hiru egun=ez*

rain=DEF last.PFV has(AUX) three day=INS

「雨が 3 日間続いた」

b. *ur=a iraki-ten du*

water=DEF boil-IPFV has(AUX)

「お湯が沸いている」

c. *iguzki=a dirdir joi-ten zuen*

sun=DEF glaring shine.PFV had(AUX)

「太陽がぎらぎら照りつけていた」

d. *haize gaitz=a ufa-tu du aste bat=ez*

wind strong=DEF blow-PFV has(AUX) week one=INS

「強い風が 1 週間吹いた」

4.2 存在と所有の両方を選択する自動詞

4.2.1 意味的条件がないもの

次に、存在動詞と所有動詞の両方を選択しうる動詞のうち、選択に意味的な条件がないものを取り上げる。借用語を除くと、このような動詞は(14)の2つの食事動詞に限られる。このような食事動詞は、中部諸方言や低ナバラ方言の一部では能格主語を取るように変化していることが確認されている(Aldai 2009)。Aldaiによれば、食事動詞に関する等語線は低ナバラのサンジャンピエドポール周辺にあり、それよりも東側の地域では絶対格主語を、西側の地域では能格主語を取るとされる。レクンベリはサンジャンピエドポールのすぐ東にあり、それを反映してか Iribarne 氏には存在動詞も所有動詞も容認される。

(14) *afaldu* 「夕食を取る」、*axkaldu* 「朝食・昼食を取る」

sei=etan {*afal-tzen/axkal-tzen*} {*niz/dut*}
six=DEF.PL.LOC {*have.dinner-IPFV/have.breakfast-IPFV*} {*I.am(AUX)/I.have(AUX)*}
 「私は6時に {夕食・朝食} を取る」

4.2.2 意味によって交替する自動詞

ある状態で移動することを表す自動詞(15)は、意味によって存在動詞と所有動詞を選択し分ける。着点を明示・暗示して、位置変化を焦点とする限界的な用法では存在動詞を取り、状態に着目して活動を表現する非限界的な用法では所有動詞が選ばれる。これらの移動動詞は、先行研究でも中部諸方言で交替することが指摘されているが(Aldai 2009)、このような意味的条件があるかどうかは不明である。

(15) *bidaiatu* 「旅行する」、*hegaldatu* 「飛ぶ」、*igerikatu* 「泳ぐ」、*jauzi* 「跳ぶ」

- a. *Manex jauz-i du*
 M. jump-PFV has(AUX)
 「Manex はジャンプした」
- b. *beldurr=ekin jauz-i ziren plaza=ko errepide=rat*
fear=DEF.PL.COM jump-PFV they.were(AUX) square=LOC.ADN road=ALL
 「彼らは怖がって広場に向かう道路へ飛んで行った」
- c. *haurr=a-k Errobi=n igerika-tzen dute*
child=DEF-PL E.=LOC swim-IPFV have(AUX)
 「子供たちは Errobi 川で泳いでいる」
- d. *bazter artio igerika-tu niz*
riverside up.to swim-PFV I.am(AUX)
 「私は川岸まで泳いだ」

argitu「光る」は、Aldai (2009) によれば、絶対格主語と能格主語の交替を示す動詞のひとつである。絶対格主語のときは「明るくなる」、能格主語のときは「輝く」を意味する。Aldai は、前者は主語の状態変化を表しているために被動者性が高く、そのため絶対格となるのではないかとしている。Iribarne 氏のバスク語でも、*argitu* が「(空が) 明るくなる」場合には存在動詞も所有動詞も可能である (16b)。「明るくなる」のときは限界的变化として一類に、「輝く」のときは (13) に挙げた他の放出動詞と一緒に二類に分類されると考えられる。

- (16) a. *zeri=an izarr=a-k argi-tzen dute*
 sky=LOC star=DEF-PL shine-IPFV has(AUX)
 「空で星が光っている」
- b. *zeri=a argi-tu {da/du}*
 sky=DEF get.light-PFV {is(AUX)/has(AUX)}
 「空が明るくなった」

4.2.4 非借用語のまとめ

非借用語について言うと、Iribarne 氏のバスク語は、自動詞が原則として能格主語を取らないという東部諸方言の特徴をよく反映している。バスク地方全域で能格主語を取る例外的な 4 つの自動詞は必ず所有動詞を選択する。それ以外の自動詞のうち、食事動詞は、より保守的と考えられる存在動詞に加え、所有動詞を選択することもできる。食事動詞の変化はレクンベリ周辺を等語線として起きていることから、このような揺れが存在するのは自然である。また、同氏のバスク語には存在動詞と所有動詞が意味によって交替する自動詞がある。そのうち、移動動詞の助動詞が限界性によって交替する現象はこれまで知られていなかったものである。

4.3 借用語

4.3.1 放出と非限界的移動

前節の議論から、Iribarne 氏のバスク語における二類動詞は、無生物主語の放出動詞（および無生物主語の *iraun*「続く」）、食事動詞、非限界的な移動動詞、の 3 つの意味グループに分けられることが明らかになった。このうち、無生物主語の放出動詞と非限界的な移動動詞のグループが実際に話者の知識として重要な地位を占めることを、フランス語の動詞との関係が明らかかな借用語を検討することで示す。

まず、(17) のフランス語から借用された放出動詞は、すべて所有動詞のみを選択する。特に、*vibratu*「震える」については、バスク語の伝統的な音素にはない *v* 音が現れていることから、借用が新しいと考えられる。これらが所有動詞のみを取るのは、話者の知識のなかで「無生物の主語者がエネルギーを放出することを表す動詞は所有動詞を助動詞に選択する」という知識が確立していることによると考えられる。

(17) *briatu* 「輝く」 < *briller*、*vibratu* 「震える」 < *vibrer*、*zonatu* 「音を出す」 < *sonner*

- a. *vitr=a bria-tu du*
 windowpane=DEF glitter-PFV has(AUX)
 「窓ガラスが輝いた」
- b. *vitr=a vibra-tzen du*
 windowpane=DEF vibrate-IPFV has(AUX)
 「窓ガラスが震えている」
- c. *telefon=a zona-tzen du*
 telephone=DEF ring-IPFV has(AUX)
 「電話が鳴っている」

次に、(18)の移動動詞は、限界性によって存在動詞と所有動詞の交替を示す。やはり、*ramatu* 「ボートを漕ぐ」の語頭のr音は、この動詞の借用が新しいことを示唆する。これらが交替を示すことから、前節で提示した移動動詞の交替に関する知識は話者のなかでしっかりと定着したものであることがわかる。

(18) *kurritu* 「走る」 < *courir*、*patinatu* 「スケートをする」 < *patiner*、*ramatu* 「ボートを漕ぐ」 < *ramer*、*zkiatu* 「スキーをする」 < *skier*

- a. *lurrikara bat=en gatik kanpo=rat kurri-tu niz*
 earthquake one=GEN because.of outside=ALL run-PFV I.am(AUX)
 「地震が起きたので私は外へ走った」
- b. *gaur denbora ederr=a zen, zereneta kanpo=an kurri-tu dut*
 today weather fine=DEF was so outside=LOC run-PFV I.have(AUX)
 「今日は天気良かったので私は外で走った」
- c. *bazter artio rama-tu gira*
 riverside up.to row-PFV we.are(AUX)
 「私たちは岸までボートを漕いだ」
- d. *indarr=ez rama-tu dugu*
 vigor=INS row-PFV we.have(AUX)
 「私たちは勢いよく漕いだ」

これらのスキーマがしっかりと定着したものであることは、他の借用語と比べるとはっきりする。(19)に示した借用語は、存在動詞と所有動詞のどちらも可能である。これまでに述べた動詞と以下の動詞には、フランス語で所有動詞を助動詞に選択するという共通点がある。今回の調査では、フランス語で所有動詞を用いるものは必ず Iribarne 氏のバスク語でも所有動詞を使うことが可能であった。その点では、これらの動詞は同じふるまいをする。しかし、無生

物主語の放出動詞や、非限界的移動動詞が義務的に所有動詞を取るのに対して、以下の借用語は存在動詞を選択することも可能である。

- (19) *aterrizatu*「着陸する」< *atterrir* (cf. *atterrissage*「着陸」)、*avortatu*「中絶する」< *avorter*、*erreñatu*「君臨する」< *régner*、*fermätatu*「発酵する」< *fermenter*、*funtzionatu*「機能する」< *fonctionner*、*manifeztatu*「デモをする」< *manifeste*、*pauxatu*「休憩する」< *pauser*
- a. *avion=a aterrizatu-ko {da/du} zazpi ta erdi=tan*
 airplane=DEF land-FUT {is(AUX)/has(AUX)} seven and half=LOC
 「飛行機は7時半に着陸する」
- b. *gasna hoi-k fermäta-tzen {dira/dute}*
 cheese that-PL ferment-IPFV {are(AUX)/have(AUX)}
 「そのチーズは発酵中だ」
- c. *maxin=a ez {da/du} funtziona-tzen*
 machine=DEF not {is(AUX)/has(AUX)} function-IPFV
 「機械が動いていない」
- d. *atzo manifezta-tu {gira/dugu} Garazi=n*
 yesterday demonstrate-PFV {we.are(AUX)/we.have(AUX)} G.=LOC
 「昨日は Garazi (サンジャンピエドポール) でデモをした」

これは、さまざまなスキーマ間の競合の観点から説明することができる。そもそも、(19)の借用語が存在動詞を選択するのは、Iribarne 氏の体系で自動詞の大部分が存在動詞を選択することにより、所有動詞を選択するのは、これらの動詞がフランス語で所有動詞を選択し、そのようなフランス語の動詞が同氏の体系でも所有動詞を選択する *N+egin* の句動詞に対応することによると考えられる。ところで、容認性判断はカテゴリー化の一種として捉えることができる (Langacker 2008: 227ff.)。 (19) の借用語の使用は、上述した2つの抽象度の高いスキーマによってカテゴリー化されるために、両者ともに選択しうるのである。一方で、無生物主語の放出動詞や非限界的移動動詞といった低次のスキーマは、それらのスキーマに比べて抽象度が低く、カテゴリー化の対象となる借用語との精密化の距離が小さいため、競合に勝つ。したがって、これらの動詞は所有動詞しか選択できないと説明できる。

5. おわりに

前節で提示したデータの興味深い点は大きく分けて2つある。第1に、(19)の借用語の例からは、Iribarne 氏のような二類自動詞が非常に限られた体系を持っていても、フランス語の非代名動詞を二類自動詞として使いうることがわかる。これは、二類自動詞の広がりという言葉変化においてロマンス語からの影響が重要な役割を果たしていることを示唆する。二類自動詞が限られていてもフランス語の非代名動詞からの借用に所有動詞が選択されうるのは、*N+*

egin の句動詞との意味の対応によると考えられる。

一方で、無生物主語の放出動詞や非限界的移動動詞では所有動詞のみしか使えないという事実からは、例外的な二類自動詞のなかでもこれらの意味グループが言語単位として定着しており、高い際立ちを持っていることが明らかになった。バスク語の自動詞分裂の歴史を考える上で、このような意味グループの動詞に注目する必要があるであろう。

略号一覧

グロスの付し方は Leipzig Glossing Rules に従った。同ルールに記載されていない略号は以下の通り。ADN: 連体形、AOR:アオリスト、GER: 動名詞、PRT: 分格、PRV: 動詞前接辞。

参考文献

- Alberdi Larizgoitia, Xabier (2003) The transitivity of borrowed verbs in Basque: an outline. In: *ASJUren Gehigarriak 46: Inquiries into the lexicon-syntax relations in Basque*, 23–46.
- Alcázar, Asier (2003) A note on the typological classification of Basque, split intransitivity and the unaccusative hypothesis. *Working Papres of the Linguistic Circle* 17: 1–10.
- Alcázar, Asier (2006) One-place and two-place predicates that concern the unaccusative hypothesis and the typological classification of languages. *ASJU* 15: 1–22.
- Alcázar, Asier (2012) A deceptive case of split-intransitivity in Basque. In: Pirkko Suihkonen, Bernard Comrie & Valery Solovyev (eds.) *Argument structure and grammatical relations: A cross linguistic typology*, 1–16. Amsterdam: John Benjamins.
- Aldai, Gontzal (2000) Split ergativity in Basque: The pre-Basque antipassive imperfective hypothesis. *Folia Linguistica Historica* 21: 31–97.
- Aldai, Gontzal (2008) From ergative case marking to semantic case marking: The case of historical Basque. In: Mark Donohue & Søren Wichmann (eds.) *The typology of semantic alignment*, 197–218. Oxford: Oxford University Press.
- Aldai, Gontzal (2009) Is Basque morphologically ergative? Western Basque v.s. Eastern Basque. *Studies in Language* 33: 783–831.
- Arkadiev, Peter M. (2008) Thematic roles, event structure, and encoding in semantically aligned languages. In: Mark Donohue & Søren Wichmann (eds.) *The typology of semantic alignment*, 101–117. Oxford: Oxford University Press.
- Burzio, Luigi (1986) *Italian syntax: A government-binding approach*. Dordrecht: Reidel.
- Bybee, Joan & David Eddington (2006) A usage-based approach to Spanish verbs of ‘becoming’. *Language* 82: 323–355.
- Comrie, Bernard (2013) Alignment of case marking of full noun phrases. In: Matthew S. Dryer & Martin Haspelmath (eds.) *The world atlas of language structures online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. <http://wals.info/chapter/98> [accessed on 2017-04-22].

- Cutting, Lincoln Ward (1994) Semantic parameters of Basque split intransitivity in Role and Reference Grammar. *Proceedings of the Twentieth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society: General Session Dedicated to the Contributions of Charles J. Fillmore* 145–157.
- de Rijk, Rudolf P. G. (2008) *Standard Basque: A progressive grammar*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Dixon, R. M. W. (1994) *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Donohue, Mark (2008) Semantic alignment systems: What’s what, and what’s not. In: Mark Donohue & Søren Wichmann (eds.) *The typology of semantic alignment*, 24–75. Oxford: Oxford University Press.
- Dowty, David (1991) Thematic proto-roles and argument selection. *Language* 67: 547–619.
- Eusko Jaurlaritza (2013) *V. inkesta soziolinguistikoa 2011*. Eusko Jaurlaritza: Vitoria-Gasteiz.
- Holisky, D. A. (1981) *Aspect and Georgian medial verbs*. New York: Caravan.
- Lafitte, Pierre (1979) *Grammaire basque: Navarro-labourdin littéraire*, édition revue et corrigée. Donostia: Elkar.
- Lafon, René (1975) Indices personnels n’exprimant rien de déterminé dans les verbes basques. In: *Mélanges linguistiques offerts à Emile Benveniste*, 331–337. Paris: Société Linguistique de Paris.
- Laka, Itziar (1990) Negation in syntax: On the nature of functional categories and projections. Doctoral dissertation, MIT.
- Laka, Itziar (1995) Thetablind case: Burzio’s generalization and its image in the mirror. In: E. Reuland (ed.) *Arguments and Case: Explaining Burzio’s generalization*, 103–129. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive grammar: A basic introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levin, Beth (1983) On the nature of ergativity. Doctoral dissertation, MIT.
- Levin, Beth (1989) The Basque verbal inventory and configurationality. In: László Marác & Pieter Muysken (eds.) *Configurationality: The typology of asymmetries*, 39–62. Dordrecht: Foris.
- Levin, Beth & Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Merlan, Franceska (1985) Split intransitivity: Functional oppositions in intransitive inflection. In: Johanna Nichols & Anthony C. Woodbury (eds.) *Grammar inside and outside the clause: Some approaches to theory from the field*, 324–362. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mithun, Marianne (1991) Active/agentive case marking and its motivations. *Language* 67: 510–546.
- Næss, Åshild (2007) *Prototypical transitivity*. Amsterdam: John Benjamins.
- Nichols, Johanna (2008) Why are stative-active languages rare in Eurasia? Typological perspective on split subject marking. In: Mark Donohue & Søren Wichmann (eds.) *The typology of semantic alignment*, 121–139. Oxford: Oxford University Press.
- Ortiz de Urbina, Jon (1989) *Parameters in the grammar of Basque*. Dordrecht: Foris.
- Oyharçabal, Bernard (1992) Structural case and inherent case marking: ergaccusativity in Basque. In:

- Joseba A. Lakarra & Jon Ortiz de Urbina (eds.) *Syntactic theory and Basque syntax*, 309–342. Donostia-San Sebastián: Diputación Foral de Guipúzcoa.
- Perlmutter, David M. (1978) Impersonal Passives and the Unaccusative Hypothesis. In: *Proceedings of the 4th annual meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 157–190.
- Salaburu, Pello (1992) Euskara, hizkuntza ergatiboa ote da? *Iker* 6: 417–433. Bilbao: Euskaltzaindia.
- Sarasola, I. (1977) Sobre la bipartición inicial en el análisis en constituyentes. *ASJU-International Journal of Basque Linguistics and Philology* 11: 51–90.
- Siewierska, Anna (2013) Alignment of verbal person marking. In: Matthew S. Dryer & Martin Haspelmath (eds.) *The world atlas of language structures online*. Leipzig: Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology. <http://wals.info/chapter/100> [accessed on 2017-04-22].
- Trask, R. L. (1979) On the origins of ergativity. In: Frans Plank (ed.) *Ergativity: Towards a theory of grammatical relations*, 385–404. London: Academic Press.
- Trask, R. L. (1997) *The history of Basque*. London: Routledge.
- Trask, R. L. (2002) Ergativity and accusativity in Basque. In: Kristin Davidse & Béatrice Lamiroy (eds.) *The nominative & accusative and their counterparts*, 265–284. Amsterdam: John Benjamins.
- Van Valin, Robert D., Jr. (1990) Semantic parameters of split intransitivity. *Language* 66: 221–260.
- Zuazo, Koldo (2008) *Euskalkiak: Euskararen dialektoak*. Donostia: Elkar.
- 石塚政行 (2012) 「バスク語レクンベリ方言における能格と同様の機能を持つ絶対格」『日本語学会第 144 回大会予稿集』 222–227.
- 石塚政行 (2013) 「バスク語レクンベリ方言における自動詞分裂の意味的・形式的動機」『日本語学会第 145 回大会予稿集』 106–111.
- 平沢慎也 (2015) 「前置詞 by の意味を知っているとは何を知っていることなのか：多義論から多使用論へ」博士論文, 東京大学.
- 福井夏来 (2016) 「バスク語の自動詞文における能格の出現条件について」『思言：東京外国語大学記述言語学論集』 12: 161–168.
- 吉田浩美 (2000) 「バスク語アスベイティア方言の主要な動詞述語に関する記述的研究」博士論文, 東京大学.

Split Intransitivity and Bilingualism in Basque

ISHIZUKA Masayuki
noitartsinimda@gmail.com

Keywords: Basque, split intransitivity, ergativity, bilingualism, borrowing

Abstract

Basque has two distinct patterns of marking intransitivity: Type A intransitives prototypically take an absolutive-marked patientive argument and select the existential auxiliary verb *izan*, while Type B intransitives take an ergative subject and select the possessive auxiliary verb **edun*. Western varieties clearly distinguish the two types, whereas in eastern dialects, Type B verbs are narrowly confined and considered to be exceptional. Varieties spoken between the two areas display an intermediate pattern. Historically speaking, Eastern Basque is conservative compared to Western Basque.

This paper presents data contributed by a speaker from the area where central and eastern varieties meet, focusing on intransitive verbs that seem to have been borrowed recently from French. Type B verbs account for less than 10% of the intransitives sampled. Among those Type B verbs that have not been borrowed recently are two major groups: inanimate emission verbs and atelic directed motion verbs. I argue that these semantic groups are highly salient in the speaker's grammatical knowledge, drawing on the patterns in which the borrowed intransitives are categorized as either Type A or Type B. Inanimate emission verbs and atelic directed motion verbs that were recently borrowed *must* be marked as Type B, while other loan verbs *can* but *need not* be marked as such when the French counterparts select *avoir* 'have' as perfect auxiliary. Borrowed intransitives are always marked as Type A if their French equivalents select *être* 'be'. These patterns also suggest that the correspondence between Basque and French split intransitive systems can be established even when Type B intransitives are a small minority.

(いしづか・まさゆき 東京大学)